岩波講座 東洋思潮 〔東洋言語の系統〕

滿蒙言語の系統

石濱純太郎

岩波書店

滿蒙言語の系統

石濱純太郎

目次

一 滿蒙言語……三
二 アルタイ語……七
三 蒙古語……一三
イ 現代蒙古語……一三
ロ 異民族と蒙古語……二六
ハ 蒙古文語……二九
ニ オイラト文語……三四
ホ 蒙古新文語……三六
四 滿洲語……三九
イ 現代ツングウス語族……三九
ロ 現代滿洲語……四八
ハ 女眞語……五〇
ニ 滿洲文語……五二

一　滿蒙言語

滿蒙言語の系統と云ふ課題であるが、滿洲蒙古の言語の系統と云ふ事かも知れない。然しさう云ふ事だとすると、滿洲蒙古に行はれてゐる凡ての言語の系統と云ふ意味にも取れるが、それでは少し範圍が廣過ぎる樣だから、多分は滿洲語蒙古語の系統と云ふ丈の事であらうと思ふ。卽ち普通に云ふ滿洲語蒙古語の系統はどんなものかと云ふ事であらう。たゞ玆に注意をしなければならないのは、現今では滿洲語と云ふと滿洲國の建設以來滿洲國の言葉が滿洲語だとして、支那語を滿洲語と世間で言ひ慣はしてゐる事である。滿洲國が建設されたんだから、滿洲で普通に使用されてゐる支那語を滿洲語と稱へたつて更に差支ない事ではあるが、この新滿洲語は從來滿洲語と名付けられてゐたものとは全然異つた系統のものである事を知らねばならない。從來呼ばれてゐた滿洲語とは、滿洲地方から勃興して終には支那全部を支配して淸朝の天下を創めた民族の言語であつて、滿洲語とも淸語とも稱せられたものである。この語を表はす文字も全然漢字とは別種のものであるから、滿洲文とも淸書とも稱せられてゐた。この言語文字は滿洲民族の支那化されるに從つて漸次衰へて行つたので、滿洲朝廷卽ち淸國政府は度々種々保存流傳の方法を講じたのだが、矢張りその勢を阻止する事が出來なくなり、終には亡滅して了つたものの樣に迄世間から思はれるに至つた。滿洲民

族がその言語を漸く忘れ去らうとしてゐる事は事實でもあるが、既に死んだ言語になつてゐると思ふのは大に誤つてゐる。滿洲事變後に出た我が關東軍や滿洲國政府の告示に漢文蒙古文と列んで滿洲字滿洲語のものが有つたのを展覽會などで見て知つてゐる人は多からう。之を以て見ても滿洲語滿洲字が死物で無く、今だに實用されてゐる事を知るに足る充分の證據とならう。又浦鹽の東洋學院には滿洲語の講座があり、我が大阪外國語學校にもこの語の課目がある。死語でない生きてゐる言葉であればこそである。古い文化語として丈であれば、かゝる學校では採用しない筈である。世の殊に滿蒙に留意する人々の中にもかゝる實用的價値を持つてゐる滿洲語を全然死語と誤信してゐるものがかなりあるのは現下の我國としては恥辱であらう。學者識者に於ては誤解を世に布く事であるから、かゝる誤謬を筆にしたり放送したりする事は殊に注意されたいものである。かゝる次第であるから、今の世に行はるゝ支那語を滿洲語と稱する事は、本來の滿洲語との間に混雜誤解を生ずる恐れが多いから、實は何とか考慮の必要があると信ずる。この課題の滿洲語と云ふのは勿論本來の滿洲語である事は他に支那語の系統を書かれる先生があるので明白である。混雜しない樣に讀者にお願ひする。

偖て、その滿洲語と蒙古語とはトルコ語（土耳古語）と親類關係のある言語であるから、よく此等を一括してウラル・アルタイ(Ural-Altai)語族とか、ツラン(Turan)語族とか、北方ツラン語族とか名付けられたが、今では先づ

一　トルコ語團（語族とか語團とかと云ふが別に難しく考へなくともいゝので部類分の便利上である）

二　蒙古語團

三　ツングウス（通古斯 Tungus）語團（この語團の中の一つが滿洲語）

の三つを一つの部類としてアルタイ語系と呼び、これをハンガリイ (Hungary) 語、フィンランド (Finland) 語のやうな東歐羅巴の言語から、露領シベリアのオスチヤク (Ostiak) 語、モルドウィン (Mordwin) 語などに至る間の種々の言語を一つの部類としたウラル語系と併立するやうに考へ、或は尙ほすゝんではこのウラル・アルタイ兩語系間には更に古い親類關係が存するのではないかと云ふ。從前は此等ウラル・アルタイ兩語系に屬する諸言語は皆同一部類だと考へたものだから、ウラル・アルタイ語族として一括したり、ツラン語族として總稱したりしたんだが、だんだん研究がすゝむにつれてこれを二分してウラル系アルタイ系とするに至つた。然しこの兩語系間の關係もまださう容易くは斷定出來ないのであるから强ひて系統付けるにも及ばない。たゞトルコ語と蒙古語とツングウス語との三つは兄弟關係があるから、これを總稱してアルタイ語族といふと承知してゐればよろしい。學問進步の程度がそのあたりまでしか行つてゐないからそれでいゝのである。ウラル・アルタイ語族は印度歐羅巴語族等と併立し、これをウラル系アルタイ系に分つと云ふ風に整然とはまだ行かない。豫想通りさうなるかも知れないが、又ならないかも知れないんだ。

アルタイ語族とか語系とか云ふのは、トルコ語蒙古語ツングウス語の分布がアルタイ（阿爾泰）山を大體中心にしてゐるから左樣名付けたので、ウラル語族がウラル山中心であるのと同じわけである。

そこで本課題の蒙古語はこのアルタイ語族の蒙古語團の一群を解說すればいゝのだが、滿洲語はそのツングウス語團中の一類なのだから、少しく釣合が取れない樣である。殊にツングウス語團中でも南方のものは滿洲國內へ這入るものも多いから、若干は觸れなくては參考にもならないから、少しはツングウス語全體にも及ばうと思ふ。課題の範

圍を限局し乍ら又佚脫するが、一に便宜に從ふのみである。

アルタイ語學の研究は最近どんどん進步しつゝあると云つても差支ない。從前は言語學者は概ね印度歐羅巴語族の研究に專心して、ウラル語アルタイ語は少數の人しか從事しなかつたが、近年は東洋學の進步と共にさうでなくなつて來た。固より地理的政治的文化的の諸關係があつて、さう何處の國でも研究すると云ふわけには行かない。さう云ふ諸關係の最も緊密なる情態の下に在る國はロシアと支那と我國とである。尤もトルコ語族は歐洲殊に常に問題の中心たるバルカン(Balkan)半島に存在するから、歐洲諸國に特に注目され研究されてゐるのは當然であるが、他の蒙古語ツングウス語は何分にも間接になつてゐるから、それほど熱心ではない。然しこの最も關係深い日露支三國の内で、最も研究の深く博く進んでゐるのは、その聯邦內に三語族を抱擁してゐるロシアである。ロシアは何と云つてもアルタイ語族の研究にかけては古くから世界の覇權を握つて今だにこれを維持し、中々に及び難い。ソヸエト政府になつてからは、特に對異民族文化政策の爲めに奬勵補助をしてゐるから、近年特に研究が活潑のやうである。今の處ではアルタイ語族の研究としては、ロシアの出版物を參考にせなければ到底良好なる成績を期待し難いと僕自身には思つてゐる。現下の事情ではこれ等の參考書は十分に僕達なんかの手には入り難いので遺憾千萬である。兎に角僕の意見から云へば、アルタイ語就中滿蒙言語の研究に充分に這入らうと思ふ人々はロシア語を先づ習得して置く必要がある。研究はどのやうにして試みても成績は上るが、ロシア文獻を參考利用し得る方が非常に便利であるからだ。專門にこの語學に從事する人ならば勿論不可闕の必要條件であるし、それほど深くは這入る要のない人でも相當研究したいなら若干のロシア文獻の知識が下らない勞力を省く。古くて今ではさう價値のない他國の參考書なんかに骨折る

のは愚且つ損である。吾友守屋君笠井君の如き新鋭の學者がこの點に於て大に努力せんとするに敬意を表する。次に支那の學界はまだ舊態依然たるものである。さう云ふ我國もアルタイ語學の研究は序の口である。僕なんかが云ふのは口はゞかるわけであるが、我國の光輝ある滿蒙學中で語學の一科は一等後れてゐるやうに思はれる。刮目すべき著書注意に價する論文が決して無いのではないが、一般に云ふと程度は低い。これは日滿兩國の密接なる關係ある今日に於て賞めた話ではない。實用の爲めから云つても、學術研究の爲めから云つても、ロシアの程度に早く追つ付きたいものである。

アルタイ語學の參考書として何を擧げたらいゝのか僕はよく知らない。一般言語學の概說の本には何か書いてあるだらうとは思ふが、讀んだ知識が少いから、何がいゝかを言ふを得ない。上に書いたアルタイ語の所は實は吾友江實君が「大亞細亞主義」の今年五月號に載せた「日本民族の起源とフィン・ウゴール語に就て」と云ふ文に據つたものである。先づ知る限りでは佛文ではあるが、メイエとコオアン監修の「世界の言語」(Les Langues du Monde, par un groupe de linguistes sous la direction de A. Meillet et Marcel Cohen. Paris, 1924) の中にドニイ (J. Deny) の書いたものを勸めたい。僕自身も之を參考として書くのだ。

二　アルタイ語

上述の如くアルタイ語族は

に三大別せられると云ふが、それはこの三語團に共通であつて他の語團とは異なる現象が存在すると云ふ意味なのである。そこでその共通せる現象を見てアルタイ語の特色を知ると云ふ事となる。その共通の關係をドニイが上記の書に於て纏めた所によると次の通りである。

アルタイ語族
- 甲　トルコ語團
- 乙　蒙古語團
- 丙　ツングウス語團

I　音韻。

1　母音調和。母音調和と云ふのは、母音に種類があつて、或る一つの言葉の中の母音は皆同種類のものから組織され、異種類の母音を混じないのである。さうして之に添附するテニヲハでも他の接尾辭でも皆附せられる言葉の母音と同種類の母音を附するのである。だからテニヲハ等の接尾辭は凡て母音の種類と同じ丈の異體を有するわけで、舊トルコ文字の如く母音を表はさないのは却つて一種で濟む便利な點もあるわけである。

2　或る子音と母音調和との對應。これは最もよく喉音に表はれるので、前口蓋喉音の k・g は前部母音と、後口蓋喉音の q・r は後部母音と對應して結合する。これは子音母音の發音位置の近似の結果當然さうなるのであるが、日本字で書けば皆カ行ガ行で區別が出來ない。トルコ語では尙ほ多くの子音にこの例がある。

3　一語の發聲に於ける有聲破裂音の忌避。これもトルコ語で最も嚴しい。蒙古語でもン ṅ で始まる言葉はないし、滿蒙兩語共に r で始まるものもない。だからロシアと云ふ語はオロス oros となる。

4　半母音の還元。wは母音の様になり、yは子音となつて終ふ。

5　母音の不變。母音は大抵固定して殆んど變らない。

6　語尾のヌnはよく脫落する。

Ⅱ　語の構成。

1　子音は語根に於ても接尾辭に於ても並列しない。

2　語の發聲に複合子音がない。

3　兩子音で一音綴の終る語は殆んど無い。前子音がr・lの時は例外である。滿洲語では殆んど母音で一音綴が終る。

Ⅲ　文法。

1　文法的性の區別がない。

2　數は單複で複數はない。

3　語根或は語根に接尾辭（Suffix）を附しその意を引伸した語基がその儘使用され得る。動詞の語根語基はその儘で命令法二人稱單數であり、名詞の語根語基は單數主格である。

4　文法的變化も皆接尾辭で示され、接頭辭（Prefix）挿間辭（Infix）は無い。此等の助辭は母音調和の變化がある丈で何處でも變らないから見出し易い。文法の研究は結局接尾辭の研究と云へる。

5　接尾辭は三つに分けられる。

a 語基構成の接尾辭。語根又は語基に附して新たなる語基を作るもの。一つの語根又は語基から引伸した一新語を作るのである。

b 文法的變化の接尾辭。格例法とか動詞變化の意味を添える爲めに附するもの。邦語のテニヲハ及び助動詞などと同じと思へばよい。

c 語基構成でもあり文法變化とも云へる接尾辭。例へば代名詞的接尾辭。

トルコ語の例

at 馬

at-im 私の馬

at-lar-im 私の馬等

この im の如きものである。これは人稱・數によつて變化する。

6 一語の最初の部分に語根が有る。接頭辭が無いから自然さうなる。

7 接尾辭ばかりであるから、印歐語の様な前置詞がなくて後置詞がある。

8 動詞變化も接尾辭で表はすから只一種で濟ます。變化の様に見えるものは動詞語根の母音による母音調和の異同丈である。

9 同じ様に動詞の時・調・法と云ふものも接尾辭で表はされる。

Ⅲ 文章法。

1　語の位置は常に副部が主部に先立つ。故に

a　限定語は被限定語に先立つ。故に

α　形容する語句は名詞の前に

β　副詞語句は動詞の前にある。

b　補格語は凡て說明語の前にある。

c　主語は說明語の前に立つ。

d　動詞形は凡て句の終りにある。

2　關係代名詞・接續詞が殆んど無いから、印歐語族にある複合文句は動詞の種々なる形で之を補ふ。

以上はドニイの記す所を略述したんだが、印歐語族の人の見る所であり、且つ抽象的な文句で書いてあるから、少し分り難いかも知れないが、大體は邦語を例として想像すればハツキリするであらう。

偖て以上の共通現象の中で特に目に著くものは、語が凡て接尾辭によりて形成され、又文章をも構成されることである。この特色に注意して、接尾辭が粘著或は膠著するのだからと、從來の學者はアルタイ語族を粘著語膠著語卽ちAgglutinative language だと稱したものだつた。さうして印歐語族の様な語尾變化卽ち曲折を持つ Flectional language、支那語の様な變化のない孤立語 Isolative language とに對立せしめ、その兩者の中間に位置する言語發達の一階段とした。今ではかう云ふ發達階段說は不合理な點が多いと、餘り賛成が無い様だが、然しその接尾助辭の粘著を主眼として分類した點は理のあることなんだ。接尾辭粘著が確にアルタイ語族の特色の一であるが、それ計りでな

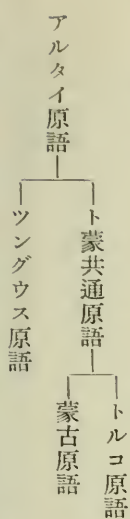
く他の點にも異色がある。例へば原蒙古語と推定さるゝ代名詞の組織などがその一つであらう。

	一人稱	二人稱	三人稱
單數	bi	*ti	*i
複數	ba	ta	*a

*印は推定された原語である。

尙ほ上に擧げたドニイの云ふ所に異論を挿める點もあるので、例へば蒙古語では色の形容の或るものに文法的性の痕跡であるかと見らるゝものがあつたり、代名詞の主語が動詞の下に位置したりする。だからドニイの提要は尙ほ大に研究を要するが、先づは共通特色と見て置いていゝ。結局はまだ研究がその程度の所にある事を示してゐるのだ。

かく共通の特色がアルタイ語族にあるが、最もよく以上の特色を表はしてゐるものはトルコ語團で、次が蒙古語團、而してこの兩語團間の關係は密接であつて、ツングウス語團とは隔りがある。そこでアルタイ語族の共通原語を系譜的には次表の如く見るといゝと云ふ事になる。

アルタイ原語─┬─ト蒙共通原語─┬─トルコ原語
　　　　　　　│　　　　　　　　└─蒙古原語
　　　　　　　└─ツングウス原語

又ドニイはアルタイ語研究の困難を五つの點を擧げて說明してゐる。一には各語を話す民族の源流の不明なる事。例へば匈奴にしてもトルコ說蒙古說ツングウス說があつて分らない。凡て支那の塞外民族が歷史の上でよく分つてく

るのは突厥以後で、それ以前は混雜してゐて分明なり難い。二には各民族の移動が激しい事。然も移動の範圍が廣くて西はロシアからバルカン半島迄及ぶし、年代も西曆紀元前數世紀から十八九世紀に迄亙る。三には言語の變換がある事。例へばキルギス(Kirghiz)人は元はトルコ語族でなかつたらしく、ミシエル(Miser)人は後世になつてからトルコ語族になつたらしく、エニセイ(Enissei)のタタル(Tatar)人は大部分サモイエド(Samoyed)人の後らしい。殊にサモイエド語族のカマッシ(Kamassi)人なんかは一八四〇年頃にトルコ方言を使用し始めて一八六〇年頃には彼等の祖語を忘れ果て、然も一八九〇年頃にはそのトルコ方言をも棄てロシア語を話すと云ふ驚くべき浮氣性のものである。四には各語族の中の方言的差異が比較的に少いと云ふ事。トルコ語族蒙古語族ではこの現象が顯著で、トルコ語族の中でもヤクウト(Yakut)語とチュワシュ(Chuwash)語とを除くと、推定の共通トルコ語の形は現在の方言形に非常によく似てゐる。五には各方言の發達が緩慢なる事。卽ち各語の古い資料にある言語は現代語と大した差異が見られない。以上の五つの點があるのでアルタイ語史の研究は難しいと云ふのだが、是も要するに學問が若いからである。一方から云へばそれだから研究に興味があるのだ。たゞ研究材料の土地が未開の處が多いから不便には違ひない。然し滿洲國はこの未開拓の言語學の寶庫だから、早い內に各方面に調査研究を開始されん事は待望の至りである。

三　蒙古語

イ　現代蒙古語

現代の蒙古語の諸方言は、東は滿洲國内から西は歐羅巴ロシアに及び、北はシベリアから南はアフガン西藏に亙つて存在してゐる。これらの諸方言をその類似の點から關係づけて分類したものが蒙古語の分派表であつて、固より大體は人種學上の各部族の分類と一致する。從つて又地理的にも散布情態を大觀する事も出來るから、之を地圖上に表しても見られる。これ等の分類表とか地圖としては、上引の「世界の言語」にも固より載つてゐるが、ルドネフ氏の文法 (А. Д. Руднев : Лекціи по грамматикѣ монгольскаго письменнаго языка, читанныя в 1903–1904 академическом году. Выпуск I. С.-Петербург, 1905) に附載せる地圖及び說明、ラムステッド博士の「蒙古文語とハルハ語との比較音韻論」の露譯增訂本 (Г. І. Рамстедт : Сравнительная фонетика монгольскаго письменнаго языка и Халха'ско-Ургинскаго говора. С.-Петербург, 1908) に附載せるルドネフ氏の分類表、故ウラヂミルツォフ先生の「蒙古文語とハルハ語との比較文法」(Б. Я. Владимирцов : Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия. Введение и фонетика. Ленинград, 1929) の序論に在る表と說明とが最良のものであるが、今は一番新しいものが良いものと見て、茲にはウラヂミルツォフ教授に據つて次に述べる事とする。然しルドネフ、ウラヂミルツォフ兩氏の表の異同は少からず學術的興味を指示する所があるから注意されたい。

先づ地理的に大體二つに分れ、一は西方派蒙古語、二は東方派蒙古語となる。

I　西方派蒙古語。所謂オイラト(Oirat)語とアフガン(Afghan, Afghanistan)のモゴル(Moghol)語とが之に屬する。

1　オイラト語。オイラト部族の話すオイラト語は亞細亞と歐羅巴とに擴がつてゐるので自然に諸方言に分れてゐ

る。

A　歐羅巴のオイラト語。最も西方のオイラト語で普通にはカルマク（Kalmuk）と呼ばれ、ヴォルガ（Volga）河沿岸、アストラハン（Astrakhan）、及びその附近のオイラト人の語である。二つに分れ、四つの小方言がそれに附屬する。

a　アストラハンのデルベット（Derbet）語。

α　本デルベット方言。

β　ブザワ（Buzawa）方言。

b　アストラハンのトルグウト（Torgut）語。

γ　ウラルのカルマク方言。

δ　オレンブルグ（Orenburg）のカルマク方言。このウラル・オレンブルグのカルマクは近頃ヴォルガ河沿岸へ移住するものが大變多い。

B　コブド（科布多）のオイラト語。これは亞細亞のオイラト語で、西北蒙古の科布多を中心とする。種々なる蒙古部族、オイラト部ホトゴイト（和托輝特）部素性の混雜せる種族及びよく分らない種族の言葉である。次の如し。

B_1　北部類。

a　科布多のデルベット（杜爾伯特）語。

α　ハルハのデルベット方言。

b　バイト語。

β　ハルハのバイト方言。

B_2　南部類。

c　アルタイのトルグウト（土爾扈特）語。

d　アルタイのウリヤンハイ（烏梁海）語。

e　ザハチ（Захачи）語。

γ　ハルハのザハチ方言。

f　ダムビ（Dambi）のエレト（額魯特）語。

g　ミンガト（明阿特）語。

又天山・青海・阿拉善等の各地にオイラト人が居るが、その言語はよく研究されてゐないのでハツキリ定められない。然しどうやら或者はアルタイ・トルグウト語（I 1 B_2 c）に近いオイラト語で話してゐる事は分る。ゴブクサリ（Kobuk-sari）やオルドス（鄂爾多斯）邊を遊牧するトルグウトの言葉、アラシャン・オイラトの言葉がそれである。

2　アフガンのモゴル語。この語はオイラト語その他の蒙古語とは充分に變つてゐる。何語から派出したか判斷し難い。何しろ回教文化圏内に存在してゐるので言語組織に大影響が見える。古い特色があるので知られてゐる。

3　ブリヤト（布里雅特）語。ドバイカル地方の北部語とザバイカル地方の南部語とに分れる。ブリヤト蒙古自治共和國としてソヴエト聯邦の一であるから、ロシアの影響がある。

A　北部ブリヤト語。

a　ニジュネウヂンスク（Нижнеудинск）方言。

b　アラルスク（Аларск）方言。

c　バラガンスク（Балаганск）方言。

d　ツンキンスク（Тункинск）方言。

e　エヒリト・ブルガト（Эхирит-Булгат）方言。

f　クヂンスク（Кудинск）方言。

g　カプサリスク（Капсальск）方言。

h　ウンギンスク（Унгинск）方言。

i　イヂンスク（Идинск）方言。

尚ほバイカル湖の西北岸地方、オルコン（鄂爾坤）河地方、バイカル南部地方の人々もこの北部語を話す。ブリヤトの方言名は皆その部落名から出てゐる。此等のブリヤト方言は近來研究されつゝあるから、分類上の位置も追々確定されるであらう。

B 南部ブリヤト語。

a クダリンスク (Кударинск) 方言。

b セレンギンスク (Селенгинск) 方言。

α 南セレンギンスク方言。

c ツォンゴリスク (Цонгольск) 方言。

d バルグジンスク (Баргузинск) 方言。

e ホリンスク (Хоринск) 方言。

β アギンスク (Агинск) 方言。

南部語は北部語よりはよく研究されてゐる。ザバイカル地方のブリヤト人は此等の南部方言で話すのであるが、この諸方言は南方へ行くに從つてハルハ語に近似する事例へば南方セレンギンスク語の如く、又北方へ行くに從つて北部ブリヤト語に近似する事例へばバルグジンスク語の様である。このバルグジンスク語は丁度北部語と南部語との移り換り目の言語に當る。

4 バルグ・ブリヤト (Bargu-Buriat) 語。この語は南部ブリヤト語とハルハ語及び內蒙古語との間を仲介する語で、滿洲國興安省北分省なる呼倫貝爾地方で話される。從來はよく研究されてゐなかつたが、近頃ポッペ (H. H. Поппе) 教授の研究が Asia Major 紙上に表はれた様だ。

5 ダグウル語。達呼爾などの漢字で表はされてゐる。Dagur, Dahur, Daur などとある。北滿洲嫩江附近その

他に住する民族の語である。從來は餘りよく研究されなかつたが一九三〇年にはポッペ教授のハイラルのダグウル語の研究（Поппе: Дагурское Наречие. Ленинград, 1930）が出た。

6 南蒙古語。內蒙古語と云へば我等には親しい。これも數派に分れる。

A 東部語。內蒙古の東北地方、哲里木盟、昭烏達盟の科爾沁・札賚特・杜爾伯特・奈曼・翁牛特諸旗はこの語に屬する。之を二大別して置く。

A_1 東北組、杜爾伯特貝子旗・北部郭爾羅斯族・札賚特旗

A_2 東南組、その他の諸旗。

B ハラチン（喀喇沁）語。喀喇沁・土默特の諸旗。淸室放牧の土地だから滿洲牧人も多い。

C チヤハル（察哈爾）語。察哈爾部及び錫林郭勒盟の浩齊特・蘇尼特・阿巴哈・阿巴哈納爾・烏珠穆沁諸旗が之に屬す。烏珠穆沁語は東部南蒙古語への橋渡しの語である。

D オルドス（鄂爾多斯）語。伊克昭盟・及び烏蘭察布盟卽ち四子部落・茂明安・烏喇特・喀爾喀右翼の諸旗が之に屬す。本語族の東部語は察哈爾語に近い。

南蒙古語はオルドス語研究のモステエルト（Mostaert）師や東部內蒙古語研究のルドネフ教授に依つて大體は知れてゐるが、尙ほ不充分である。この地方は我國でも元の河原女史今の一宮夫人、鳥居龍藏博士夫妻等その他數多の人の名と共に世間に熟知せられてゐるが、宮崎吉藏氏の「蒙古語旅行用會話」、松岡勝彥・伊藤三郎兩氏の「東部蒙古俗語集」、下永憲次少佐の察哈爾語の初級敎科書の樣なもの以外に殆んど見ないのは如何にも心細い。

尙後は少しこの邊の語學的研究に關心を持つて貰ひたいものだ。

7 ハルハ（喀爾喀）語。ハルハ四大部の蒙古人の語である。今の蒙古人民共和國の語である。

A ハルハ語。三つに分つ。

a 中部ハルハ語。庫倫(Urga と露人は云ひ、今では Ulan-bator) 中心の語である。ウルガ語とよく云はれる。

α ダリガンガ方言。ダリガンガ（達里岡愛）旗の方言である。

b 東部ハルハ語。元の車臣汗部、今のハン・ヘンティウル (Хан-Хентейул) 部が之に屬す。

中部ハルハ語と東部ハルハ語とは大變に類似してゐて、凡ての點に於て東ハルハ語は西部ハルハ語よりは中部ハルハ・ウルガ語に近い。

c 西部ハルハ語。元の札薩克圖汗部、今のハン・タイシル (Хан-Тайшир) 部、及び元の賽因諾顏部、今のツェツェルリク・マンダル (Цэцэрлик-Мандал) 部が之に屬す。

β サルツル (Сартул) のハルハ方言。サルツル、大小エルヂゲン (Ельджиген) 旗に屬する蒙古人の方言。西部ハルハ語との差異は著しくない。

γ コソゴル (Косогол) のハルハ方言。コソゴル（庫蘇古爾）湖の東岸住民の語であるが、西部ハルハ語・中部ハルハ語との差異は著しくない。

B ホトゴイト語。デルゲル（德勒格爾）、ベルチル（伯勒齊爾）、テス（特思）等の河畔に遊牧せる民族の語。

α ハルハのホトゴイト方言。

その他尙ほ數種の方言があるが、未だ研究されてゐないから、分類の中へは入れられない。さうして此等の言語の分類は種族と一致しないかも知れないのだ。例へば、オルコン（鄂爾坤）河・タミイル（塔密爾）河附近のエレト族はオイラト族であるからと云つてオイラト語族に入れてもいゝ樣ではあるが、周圍が緊密にハルハ族であるからその影響の下にて祖語を維持保存する事は困難であらうと思はれるから、或はハルハ語に屬する人ではなからうかと云ふ如きものである。

今の研究ではかう云ふ事は明かである。南蒙古に住するハルハ人は言語の點では南蒙古語族に屬するが、そのホトゴイト族の一派のミンガト族は現今言語の點ではオイラト語（I 1 B_2 g）に屬する。オイラト種族の和碩特部族は種種の地方に分散してゐるが、西蒙古のブルグン（布爾干）河畔に遊牧せるものは言語はアルタイ・トルグウト語（I 1 B_2 c）に屬し、ヴォルガ河の和碩特族はアストラハン・トルグウト語（I 1 A b）に屬し、ヴォルガ・カルマク人に混入したデルベット人の言語（I 1 A a）は西北蒙古科布多のデルベット語（I 1 B_1 a）とは非常に異なつてゐる。だから種族別から言語分類を求める事は出來ない事を知らねばならない。だから現在の材料でコブクサリ（和博克薩里）の遊牧トルグウト、エヂンゴル（額濟納河）河畔青海地方のトルグウト、大小オルドスに遊牧するカラシャルのトルグウト、クルカラウス（庫爾喀喇烏蘇）から西南及びクルヂャ（Һуљџака）附近に遊牧するトルグウト、ウルングル（烏隴古）湖の北方アラシャン、クルヂヤの北方クラナ（Һјана）河畔、テケス（特克斯）とカシュ（哈什）兩河沿岸、及びタルバガタイ（塔爾巴哈臺）等に住するエレト人、オルドス盆地・靑海・ツァイダム（柴達木）に放牧せる和碩特族、ツァイダム放牧のホイト（輝特）族、プルジェヴルスク（Џржевалск）附近のサルトカルマク（Сарт-Һалмаку）

人等はオイラト語族に屬すると云ひ得るとしても、アジア各地に異種族の間に散在する蒙古民族に關しては、彼等が蒙古語で話すと云へてもその何派の語であるかは中々容易に言ひ得ないものである。

又現在の所、甘州府の西南に住するウイグル（畏兀兒）のシャラユウグル人の言語、黄河河畔を蘭州府に及び、又アムド（安士）の所々に住するシロンゴル族のダルダ或はヂャホル人（Далда или Чжахор Широнголов）の言語に關する資料を少し有してゐるが、不充分であるから何語派に屬するかを決定し難い。コソゴル湖西岸のダルハト（Дархат）人の言語も同様である。

左記の蒙古人の言語に關する資料はまだ蒐集されてゐない。

一　伊犂地方及びタルバガタイのクルヂヤ附近に於ける察哈爾人。

二　ブルンギル河肅州府の北方、王門肅州の北方、庫庫諾爾湖北方の喀爾喀人。

三　北滿洲齊齊哈爾西北のマンナイエレト（Маннай-элет）旗人。

四　拉薩北方ダム河畔のダムソク（Дам-зок）人。

五　ツァイダム南方のシャライゴル（Шарай-гол）人。

重複するが見易い様に今一度こゝに分類表を掲げる。

現代蒙古語分類表

I　西方派

1　オイラト語

A　歐羅巴オイラト語

a　アストラハン・デルベット語

α　本デルベット語

β　ブザワ語

b　アストラハン・トルグウト語

γ　ウラル・カルマク語

δ　オレンブルグ・カルマク語

B　科布多オイラト語

B_1　北部類

a　科布多デルベット語

α　ハルハ・デルベット語

β　ハルハ・バイト語

b　バイト語

B_2　南部類

c　アルタイ・トルグウト語

d　アルタイ・ウリヤンハイ語

三　蒙　古　語

e　ザハチ語

γ′　ハルハ・ザハチ語

f　ダムビ・エレト語

g　ミンガト語

2　アフガン・モゴル語

II　東方派

3　ブリヤト語

A　北部ブリヤト語

a　ニジュネウヂンスク語

b　アラルスク語

c　バラガンスク語

d　ツンキンスク語

e　エヒリト・ブルガト語

f　クヂンスク語

g　カプサリスク語

h　ウンギンスク語

i　イヂンスク語

B　南部ブリヤト語

a　クダリン語

b　セレンギン語

α　南セレンギン語

c　ツォンゴル語

d　バルグジン語

e　ホリ語

β　アガ語

4　バルグ・ブリヤト語

5　ダグウル語

6　南蒙古語

A　東部南蒙古語

A_1　東北部南蒙古語

A_2　東南部南蒙古語

B　ハラチン語

C　チヤハル語

D　オルドス語

7　ハルハ語

A　ハルハ語

a　中部ハルハ語

α　ダリガンガ語

b　東部ハルハ語

c　西部ハルハ語

β　サルツル・ハルハ語

γ　コソゴル・ハルハ語

B　ホトゴイト語

α　ハルハ・ホトゴイト語

ロ　異民族と蒙古語

次に異民族の使ふ蒙古語を簡單に述べて置きたい。蒙古人が蒙古語を話すのは勿論の事であるが、他の民族の蒙古民族と特別の關係情態に在るものも之を使つてゐる。

支那人がその最たるもので、山西、陝西、甘肅、綏遠、河北、滿洲、南蒙古の土民が使用してゐる。支那人は商人職人及び移住農民として蒙古人とは特別に關係が深いから自然蒙古語で話す事となる。さうして支那人は支那式に蒙古語を習ひ、歸化城邊りで出版される手引書を使つてゐる。隨つて大抵は蒙古語と音韻組織の異なつた然も單調な語法の言葉を話し、蒙古諸種族の言語とは大分違つてゐる。然しそれにも關らず習ふ關係からか文語系からの借用が多く見られる。

ロシア人の中ではアストラハンやイルクトスク、ザバイカル地方の基督教徒はカルマク人ブリヤト人と關係が深いから各方言を話すが、矢張りどうしてもロシア式になつてロシア蒙古語と云ふ風なものになつてゐる。北蒙古にてもシベリヤロシア人がゐて、ロシア蒙古語を使用し、支那人迄が之を使ふ。

ハルハ語ホトゴイト語オイラトのデルベット語は唐努烏梁海種族内に非常に擴がつてゐるが、この種族はトルコ民族なのである。彼等は蒙古語を文化語と考へて、殊に近隣の關係もあるからよく之を話す。例へばタンヌウラを後に蒙古コソゴル湖畔へ移つたソヨト人の如きは蒙古族を我語の様に話し、恰も兩國語人と云ひ得る。コシュアガチヤの推河上流に遊牧する國境のテレンギト人もよく蒙古語を話すが、これはデルベット方言（I 1 B_1 a）である。西北蒙古及び南烏梁海のキルギス人の多くもオイラト方言（I 1 B）のどれかで話すが、その土語はトルコ語の一方言である。西北蒙古へ往來する東トルキスタンのサルト人も同例である。この地方でも蒙古語は文化語であつて、然もタンヌ・ツワ（Tainnu-tuva）國では烏梁海人と蒙古人との交通語としても使用されて居り、文化交換の工具となつてゐるのは注意すべき事である。

又他方、蒙古諸種族も他の外國語をよく知つてゐて、却てその外國語圏内に引入れられるものもある。南蒙古人のバルグブリヤト人ダグウル人は支那語の影響の下に在つて蒙古語も支那語も話し殆んど兩國語人であり、支那化の傾向が濃い。南蒙古人の内でも察哈爾人殊に喀喇沁人には支那語が漸次文化語として歐洲文明習得の工具となりつゝある。

支那アムドの邊境、甘粛、安土、青海、西藏に住せる蒙古人は西藏唐古特（Tangut）語に關係深く、アフガンの蒙古人はプシュト（Pushto）語波斯語の影響を受けてゐる。

ブリヤト人カルマク人の多くは特に歐洲文明を被つてゐるから、ロシア語をよく話し、他のロシア人と關係ある部族も多少は知つてゐる。

最近になつてはロシア語はハルハ人にも西北蒙古のオイラト人にも進入し、歐洲文明を輸入し蒙古と西洋との仲介語となりつゝある情態である。

從來蒙古の上層社會は滿洲語を了解して讀み書き話したが、四五十年來これは減少して來た。西藏語も蒙古人特に僧侶間にはよく知られ、西藏又はアムドの僧院に住したものはよく之を話す。支那と西藏との境界の西藏化された蒙古人は西藏語を話す。又西藏へ行つた事のない僧侶でも蒙古では西藏文語を知つてゐて、今では西藏でも使はない様な古風さで西藏字の御經を誦讀する。

尚ほ現在では滿洲國が獨立して日滿共同工作が凡ての點に行はれる様になつたから、少くとも滿洲國内の蒙古人に對して日本語の影響が現はれてくると見なければならない。滿洲國とは云ひ條、滿洲語の影響はさうありさうに思へ

ないけれ共、日本語支那語はウント勢力を増加するに違ひない。だから滿洲蒙古語は日支語の影響を大いに受くるが、或は日蒙又は日蒙支の複國語人とならないとは斷じ得まい。さう云ふ事はさて措いても、かゝる蒙古人に對する言語學的研究が促進さるべき絕好の機會ではないかと思ふ。

八 蒙古文語

現在の蒙古では前述の如く數多の方言が行はれてゐるが、共通語と云ふものは存在してゐない。その代りに蒙古の文語と云ふものが有つて蒙古各部族の大部分を通じて行はれてゐるんだが、現在の諸方言とは隨分異なつてゐる。その起源は古くて確かには定められないが、死せる古代の文學語であつた。それがその存在經過中には度々少しく時代時代の言語に近づいた事もある。この文語は受けた多くの變化にも關らず古風であつて、現在知り得る最も古い蒙古語よりも古い蒙古語の時代の面影を示してゐる。

蒙古人は第十二世紀になつて始めて歷史場裡に顯はれ出でるが、その時代迄はほんの少ししか記されてゐない。十三世紀の初頭に於て全蒙古民族の統一が出來て歷史上に活躍する樣になつた。

十二世紀頃には蒙古民族は多くの部族に分れて互ひに異なる多くの方言を話してゐた。現在の蒙古諸方言は皆それ等の子孫になるだらう。當時の蒙古人間にも共通語は無かつた樣である。彼等の中で最も開化してゐたものはケレイト（客咧亦惕）・ナイマン（乃蠻）の兩部であつて、彼等はアジアの文化民族たる當時天山北路に住したウイグル（畏兀兒・回紇）人、及びセミレチエに住せしカラキタイ（西遼）と關係を保持してゐた。ナイマン部殊にケレイト部は

支那、卽ち當時支那の北部はツングウス民族の女眞人が支配してゐた金、及び唐古特民族の西夏と交際が有つた。このケレイト部ナイマン部には基督教の一派景敎が行はれてゐた。

どうやら蒙古文語は成吉思汗時代迄はこの兩部族の間に行はれてゐたらしい。と云ふのは蒙古文字の起源がナイマン部に關係するからである。それは成吉思汗がナイマン部に勝つた時にナイマン汗の祕書であつたウイグル人から文字の組織を知つて之を己の部內でも利用するに至つたと云ふ話である。成吉思汗によつて蒙古人間に輸入されたこの文字は十三世紀からの資料が現存してゐて、明かにウイグル起源を證してゐる。蒙古民族の內で最もウイグル人に近いものはウイグル人と文化交通のあるナイマンとケレイトである。さうして知らるゝ通り兩部族は成吉思汗時代より早く已に基督敎を採用してゐた。よつて成吉思汗は既にナイマン部によつて始められてゐた文化事業を繼承擴大する事が容易に出來たのである。どうしても成吉思汗の時に始めて蒙古語の爲めにウイグル文字を使用したとは考へ難い。是は必ず成吉思汗が既に準備されてゐた文學語、卽ちウイグル文字の助けによつて書き記るす充分出來上つてゐた言語を、統治の必要の爲めに輸入したと云ふ事に相違なからう。この文語は已に當時の蒙古語とは違つてゐて所謂傳統的の言語であつたんだらうが、その差は現時に於て見られるよりは少かつたらうと思はれる。

この文語は或る非常に古い蒙古の方言の上に出來たものであるから、その方言こそは蒙古語史の古い層を示してゐるので、過去現在を通じての蒙古諸語中での最も遠い様相である。どの蒙古土語又はどの時代の語と云ふ事は出來ないけれども、それから直接に文語に生長したのであつた。さうして若し蒙古文學がナイマン部から發生したと云ふ傳說を正しいとすれば、この問題の方言は古ナイマン語であるわけである。

こゝに又文語は人工語で、その傳統的な姿の儘口で傳承される文學語であると云ふ事が出來る。同じ様な例が種々の民族の間にて行はれたし今も行れてゐるので、現代蒙古種族の間主としてコブドオイラト族中にもよく見られる。而してかゝる文學語は後には文字に載せられるが、それにはかゝる傳承文學の最後の形成から文字に寫される初め迄には隨分歳月を經過する。その例はバイト語（I 1 B_1 b）に見出されるので、已に古い時代のものと傳へられた傳承敍事文學語が文字にされる企圖は漸く十八九世紀になつて試みられたのであつた。

一般蒙古の地層に移植されて共通の書寫文學語となつたこの文語が、直ぐにその時代語の影響を受け始めた事は、文語の最古資料が之を證明してゐる。然し、全然當時の俗語に同化し得なかつたのは、文語が非常に俗語と異なつてゐたし又當時の一般蒙古社會の文明程度が頗る低かつたからである。尙ほこの蒙古帝國の事務文書語の任務をも取り初めた文語と列んで、生きた傳承文學語卽ち書かれてゐる文學を保護し育てる敍事詩語も存在し續けてゐたのである。

十四世紀の初めから蒙古文語發達の第二期が始まつた。卽ち西藏ウイグルの學僧達は佛敎典籍の飜譯に文語を利用し始めた。文語は語尾の形式化を受けて終に當時の言語の影響によつて起つた新制式が定まり、ウイグル式を取捨した綴字法も整つた。一見した所では、實に十四世紀の佛典飜譯はウイグル語を通じて中央アジアの文化語、ソグド語于闐語庫車疎勒語波斯語からかなり多數の語を蒙古語に移入した様だが、是等の語からの多數の輸入は明かにもつと早い時代に起つてゐるので、只如何なる方法で書物からか口からか、又兩方ともにかはどうも證明する事は出來ない。

文語は前期に於て物語歷史の語であり文書語であつた如く、十四世紀からは佛敎文學語となつて、これが文語に非常なる發展を引き起したが、然し當時の知識階級が當時の言語を利用する様努力して著しく讓步も示したに關らず時

代の言語からは離れるに至つた。然し一方には文語は引續き文書語としても働いて、この點に於ては當代語は進入し影響して行つた。かく十四世紀の文語は佛教文學語であり文書語であつたが、終に忽必烈汗帕克巴喇嘛等一味の對抗派と戰はねばならなくなつた。

忽必烈汗は國都をカンバリク (Khan-balik) 今の北平へ移してから、國際文字を作つて彼に征服された蒙古人支那人トルコ人西藏人その他にも各自の國語をその新文字で皆書き得る様にしようと考へた。そこで之を諸國の文字に通ぜる西藏サチャ (Sa-skya) 派の高僧ロオ・デエ・ヂャルツァン (bLo-sgros-rgyal-mchan) 通稱パクパ (hPhags-pa) 喇嘛に命じた。パクパラマは忽必烈が希望せる國際文字を作つたが、これは蒙古の四角文字と呼ばれてゐる。彼は又これによつて新蒙古文語を制定しようと試みた。

四角文字で書いた蒙古文は決して新文字で以前の文語を表はしたものではなかつた。それは全然他の方言で書かれてあつて、非常に當時の言語に近かつた。先づはパクパラマ及びその弟子達は根本として元の朝廷及び貴族階級の言語を採つて以前の文語を著しく許容したものであつた。元政府はこの新文語を施行して文書語文學語としようと努力したに關らずこの企圖は早速に成功はしなかつた。文學語としては依然として以前の文語が維持されてゐた。

蒙古文語の第二期は十六世紀の終り迄續いた。十四世紀の終りから十六世紀の後半の元朝沒落迄の蒙古史の暗黑時代で蒙古文化は後退し、文語はその傳統を佛教世紀に緣付け、一般には十六世紀の後半では文化新生の情態となつた。この際に注意すべきは十六世紀の終りはウイグル要素が復活一新されて來た事である。これには遠く離れたアムドに殘存して自己のウイグル佛教文學を保存してゐたウイグル移民の活動が與つて力ある。

蒙古人は自己の文語の發達の二期を通じてソグド文字から出たウイグル文字を少し書風を變じた丈で利用し續けてゐた。

蒙古文語發達の第三期は十六世紀の終り十七世紀の初めに始まり、文化生活再興佛敎復活の結果である。文語のこの期の最初に於て著しい變革があつた。無識者によつて作られた古い言葉や形などは廢棄されて、廣く國民言語の要素に接近せしめて之を人工的に古風になし、終には西藏語からの借用語が侵入する樣になつた。この期の初めに於てウイグル文字の新書風が定まり、新しい文字も創作され、而して玆に現代の蒙古文字が發生したのである。だからこの時迄十六世紀の終り迄蒙古人はウイグル文字を使用してゐたと云ひ得る。

以上の變革は一時に起つたのではない。文語及びその文字の傳統は所々では百年以上も保持されてゐた。特に綴字法は嚴重に維持された。然しこの綴字の嚴重さも時には只外見的のものであつた。古寫本なんかを謄寫する時には、既に他の形や別の規準が行はれてゐるに關らず、努めてこれを嚴格に寫したが、然し一般には動ともすれば新文語、及び印度西藏の言葉を寫す爲めに特に作られた文字の多い新文字が勝利を占めた。これ等の特別の音譯字はガリク(Galik)文字と名付けられてゐる。その內に蒙古人は時には或る言葉の讀み方を正確に示さうと欲した場合に特に滿洲文字を利用する樣になつた。

漸く言語は最後の定形を採つて、綴字の側では種々の時代に導入せられた形及び當代語の影響から出來た形なんかも許容し、又文法の側では古い要素をも正しく擇び出して使用した。その結果は古典的文語とも呼ばれ得る言語が出來上つた。

十七世紀の終り及び十八世紀では北京や南滿洲で板木による出版が盛んに行はれたから、文語は非常に明瞭なる表現をする樣になつた。古い著作も新しく板にする爲めに十七世紀の初頭のものも言語の正確な視角から新古典文語に改作された事がある。蒙古人の爲めにも、彼等の保護者滿洲諸帝の爲めにも、又北京滿洲に常住する西藏僧侶の爲めにも、章嘉胡土克圖（lČan-skya）は古典蒙古語を組織化の企圖を爲し、諸語合璧の字書や若干の文法が世に出でた。明かに規則標準を定める努力である。

この古典的蒙古文語が現在迄共通文學語として蒙古人間に存在するのである。この文語は蒙古民族の大部分の間に普及されてゐるから、佛教及び清朝は之を重要視してゐた。南蒙古・ハルハ・バルガ以外にも、蒙古文語は十八世紀にブリヤト殊にザバイカル及び西蒙古のオイラト殊に科布多地方移住民の間にも普及されたのであつた。

二　オイラト文語

十七世紀の中頃にオイラト人の間にも新文語を作るパクパラマの企圖を追想せしむる企圖があつた。和碩特出のザヤ・パンヂタ（Zaya Pandita）師は一六四八年に蒙古文字を基礎として新しいオイラト文字（todo）を創作した。然しパクパラマと同じくザヤ・パンヂタも新文字新綴字法の發明のみに止まらず、新文學語全オイラト文語を創定せんと努めたのであつた。ザヤ・パンヂタは自分の課題を全般的に觀察したのであつた。彼は實にオイラト一般の文學語をオイラト語の基礎の上に作り上げた。彼の創定して彼自身及び彼の一派によつて爲された西藏語からの多數の飜譯で發表した文語は文學的に組織され只文字上の必要から標準化されたもので決してオイラト言語そのものとは云へなか

つた。それは人造語であつて澤山な古體や蒙古體を含有してゐて、民族の生きた言語とは異なつたものであり、衒學的に導入せし綴字法が語源的法則の上に設けられてゐるのであつた。見た所ではザヤ・パンヂタにはオイラトの當代の物語り語が材料になつてゐる。

ザヤ・パンヂタの作つた文學語は漸次時代語と接觸して、且つその中に明かに顯はれてゐる規準によつて維持されたならば、容易くオイラト人の口語・文語兩方の共通文學語となり得たらう。然し實際には種々な事情の爲めにさうはならなかつた。それは主としてオイラトでは知識階級が常に大變力弱く重要なるものでなかつたからで、終に佛敎僧侶は書く文學語として西藏語を利用するに至つた。

オイラト文語は文書語の任務も勤めて非常に俗語に近づいたのだが、他の文學方面では殆んどの方面でも常にザヤ・パンヂタ一派によつて定められた硬化形態に止まつてゐた。その結果としてオイラト文語は蒙古文語と類似したものになつて、云はば蒙古文語の別種となつた。それ故に凡てに優越してゐたに關らず全蒙古文語に抗する事は出來なくなり、地位を代へるに至つた。例へば西蒙古に於てさうだつた。オイラト文語のカシュガル・ククノル・その他のオイラト人間に於ける地位に關しては精しい報告はまだ無い。

カルマク人ヴォルガ・オイラト人の間では文語の運命は悲觀的である。オイラト文語は上述その他の事情の爲めに現在では忘れられてゐる。最近ではロシア文字を採用して、デルベット語トルグウト語を基礎に新文學語を作る試みが起されてゐる。

オイラト文語は非蒙古人や異種言語の移住民の間にも少しく弘まつてゐる。例へば推河畔遊牧のテレンギト人はさ

うであつたが、今では使用してゐない。

ホ　蒙古新文語

前々章で述べた如く清朝になつて古典的文語は完成して十八世紀から現代にも亙つて隨分廣く普及されたのであるが、然し一方では社會情勢の影響を大に被つた。

先づ滿洲語と西藏語との擡頭であつた。滿洲語は清朝の國語である關係上文書語として勢力を增大し、蒙古上流社會の文學語と迄ならうとした。西藏語も蒙古文語と勢力を爭つたが、何しろ豐富なる西藏文獻を背景としてゐるものだから、その勢力によつて蒙古人の新文學語とならうとした。滿洲語は蒙古文語の影響の下に新興した勢で文書語文學語として蒙古人間に弘まつたが、云はば蒙古文語に却つて加勢をしてゐる形になつてゐた。西藏語は之に反して蒙古の寺廟中に漸次進入して遂に宗教語として普及し、恰も己が蒙古文語の如く振舞ひ蒙古文語を下級のものであるかの樣に見なすと云ふ風であつた。西藏語のかゝる進入は元朝時代にもあつたので、一時は蒙古語をも西藏文字で書くと云ふ次第であつたんだ。

かゝる蒙古文語の反對勢力もあるが、又一方蒙古文語自身が諸方言の影響を受けた。前にも述べた通り、文語が方言の感化を度々受けてゐたが、古典文語が諸方へ弘まると、玆に又各地各地でその影響を受けざるを得ないと同時に、一方には古典文語としての統一さがある爲めに共通文語として存續する力を持つ事にもなつた。然し矢張り時の經過につれて、各地で特有の古典文語が出來てそれぞれ書物が出版されるから、漸くその統一も亂れ勝になつてくる。さ

うして云はば古典文語の方言が生じてくる。現代各地で出版される書物で正確な古典文語で書いたものは殆んど見られない。さうなると又種々な試みが現はれてくる。例へば南蒙古では滿洲文字で古典文語の方言を書くとか、共通蒙古文字で方言文語を記すと云ふ様な事が出來た。二十世紀の初めにはホリブリヤト語（Π3Be）を基礎として文學語を作り之を獨自の文字で記さうと云ふ計畫がそれである。アグワン・ドルジェフ（Агвап Доржиев）師の企圖がそれである。引續いてブリヤトではいろいろと新文字新文語が考究されてゐた。

かく文語と方言と離れても、或る文語が使用されてゐると、文語の讀方がいろいろになり、文語の綴字は意味のみを保存する事となる。現在蒙古文語の文字の讀方は三種ある。一は文字通り綴字通りに讀むんだが、實はその音は各方言音で一々發音してゐる。二には文語の一言一語を方言で讀む、卽ち文語文字を方言で讀む。三には一と二との方法を兼用する讀方、卽ち大體は方言風に發音して讀むが、差異の甚だしい時は文語風を存して讀む。この三種の法が行はれてゐるが、例へば西蒙古のオイラトは第二法であり、ハルハも最近は第二法に近づきつゝある。尙ほ我國で漢文を朗讀する様な本讀み風な方法も大分に行はれてゐる。

文字は第一期はウイグル文字その儘を借用してゐたが、漸次變化を加へて今の蒙古文字になつた事は上に述べたが、ある場所では依然としてウイグル書風を保存してゐる。唐古特西藏の其處では十八世紀に尙且つウイグル文字で書いてゐた。

偖て、現今のソヸエト聯邦政府が出來てからは、ブリヤト蒙古は自治共和國となり、ハルハは人民共和國となり、凡てソヸエト政府の指導の下に獨立してゐるから、從つてその影響は大きい。兩國共に新文字新文語が定形を採る様

に指導しつゝある。ブリヤトは早くから舊蒙古文字を基礎に新文字を考案したり、又ロシア文字を基礎にして見たりしてゐたが、ソヴエト政府の諸民族語羅馬字化運動が促進されることとなつて、ブリヤトにもハルハにも新羅馬字案が檢討されつゝある。是は固より新文字の設定によつて、同時に現代大衆語を基礎としてだが實はソヴエト化された農工民衆語を基礎とした新文語を創定せんとするのであるが、如何なる經過をとつてゐるかを詳かにしない。今日迄種々の案によつて種々の出版が爲されてゐる樣だが、ポッペ教授の蒙古語教科書 (Н. Н. Поппе: Учебник Монгольского языка. Ленинград, 1932) の序論によると、一九三一年のソヴエト總會議に於ては新文語の綴字の根本的原則が定められ、該原則は大部分ポッペ自身の提案せる根本的テエゼによつて作成されたもので、その後の綴字の組織は大體一定したがまだ最後的には決定しないと云つてゐる。此等の根本的資料は不幸にして見るを得ないが、ともあれかゝる新文字新文語運動は蒙古語史上に時代を劃するに至るのだから、我國の蒙古語學界では特に注意されなければならないに關らず、その噂すら聞かないとはどうしたものだらうか。滿洲國蒙古人の文字文語、內蒙古人の文字文語を如何にすべきかは將に當面すべき重大なる問題である。等閑に附すべきものではない。

後記　本編の大體は凡て前掲ウラヂミルツォフ教授の「蒙古比較文法」の序論に據つて述べたものである。
蒙古語學の文獻を知りたい人は B. Laufer: Skizze der Mongolischen Literatur. Keleti Szemle, 8 Kötet. Budapest, 1907 がよい。この書の露譯增訂本 (Б. Лауфер: Очерк монгольской литературы, перевод В. А. Казакевича под редакцией и с предисловием Б. Я. Владимирцова. Ленинград, 1927) は原書出版以後の書目を增補して

あるから尙ほよろしい。然し增補以後にも續々良著が出てゐるから注意されたい。ハルハ・ブリヤトの新文字運動等については、Культура и письменность Востока と云ふ雜誌が羅馬字化委員から出てゐる。何でも八九册目頃から名前が變つた樣である。尙ほ N. N. Poppe: New works on the latinisation of the Mongolian written language. Bibliography of the Orient, No. 1 (1932), Leningrad, 1932 にも文獻が出てゐる。僕の知つてるのはこれ丈である。

我國での參考書は前掲ルドネフ氏の文法を譯した山口茂一譯「蒙古文法」(大正八年刊)が最もよい。言語分布圖なんか原本より大きくて美しいから見よい。

四　滿　洲　語

イ　現代ツングウス語族

滿洲語はアルタイ語族の一支派ツングウス語團に屬する語である。さうしてツングウス語團はシベリアにも存在するが、又滿洲國內にも存在するものであるから、先づ一應ツングウス語團の諸語を紹介する事から始める。

さて、ツングウス語團諸語は以前から隨分研究の對象とはなつてゐるが、小さい遊牧の諸部落が散存してゐて頗る混雜してゐるから、中々研究は面倒らしい。從つて或る程度迄纏りをつけるのが困難らしい。例へば部落名氏族名言語名なんかにも混亂があつて、その上に既に研究の對象となつた氏族の言語も今では亡びて他種の言語になつてゐるのもある。例へばウルルガ (Urulga) 河畔のツングウスは嘗てカストレン (Castrén) によつて硏究されたが、最早そ

の言葉は忘却してブリヤト語ロシア語を話し、稀れに老人が數語を記憶して居るに過ぎないと云ふ。小さい部落が諸部落至る所で同民族でも諸種の部落と錯雜し、且つ蒙古支那ロシア諸民族の間に散在してゐるのだから、人種別と言語別とが一致し難い。況んや蒙古支那ロシア及び同民族間の名の呼び方が異なるんだから厄介なものである。僕はここではシロコゴロフ (S. M. Shirokogoroff) 氏の著 (Social Organization of the Northern Tungus. Shanghai, 1929) に說明してある所により紹介するが、充分なる言語學的分類と云へないかも知れない。シロコゴロフ氏は別に Study of the Tungus Languages. Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society, vol. LV, Shanghai, 1924 の著があつて專門のものなんだが、今之を參照するを得ないのは最も遺憾とする所である。氏は尙ほツングウス字書をも編纂してゐて、最も新しい研究者の一人である。

ツングウスと云ふ語はヤクウト (Yakut) 語の tongus から出て豚を意味するトルコ語源のものだと云ふ。さうしてヤクウト人もツングウスと呼ばれ、又ヤクウトソヸエト聯邦國內に住し所謂北方ツングウス語を話す人々もツングウス人と呼ばれてゐた。之を聞いたロシア人が彼等をツングウス人として之を歐洲に紹介し、引いては人種言語の分類に學術語として之を採用し、段々廣い意味に擴大されて行つたのである。それで昔はヤクウト人もツングウス人中に分類した事もあるが、今ではトルコ族と定まつてゐる。所がツングウス民族の中に廣く滿洲地方の諸民族も這入る樣になると、支那の古書に出てくる東胡と云ふ民族が之に當るので東胡はツングウスの譯音だと云ふ說も出たが、矢張り今の所では東胡は西胡の對字で東方の胡人と見られてゐる樣だ。ツングウスとは後の支那譯字では通古斯と書く。そこで今では人種學言語學の術語としてツングウスは使用されてゐる。

ツングウス語は大きく二種に分類される。I北方ツングウス語、II南方ツングウス語。北方ツングウス語は地理的にシベリア系と滿洲系とに分ける。南方ツングウス語は皆滿洲系である。

I　北方ツングウス語派。この系統の種族は皆自ら又お互ひに evengki と稱してツングウスとは云はない。滿洲系の種族からはツングウスと呼ばれる事はある。歴史的にはこの北方派に屬する種族もこの内に這入る。例へばツランスバイカル (Transbaikal) 地方に住む蒙古化したるツングウスは今でこそ蒙古風になりツングウス語を話さなくなつてゐるが、前世紀ではツングウス語を話してゐたのである。eve が語根で ngki は接尾辭らしいが、語根の意味は明かでない。尙ほ所々でオロチェン (oročen 馴鹿持ち) とかムルチェン (murčen 馬持ち) とかと呼び合ふが、自他を區別する際に起る名稱の現象であつて定稱ではない。

1　シベリア系。

A　バルグジン (Barguzin) 語。これはネルチンスク語と近似してゐる。自稱ではオロチェンと云ふが、これは遊牧ツングウスが彼等を呼ぶ名で、彼等は又遊牧ツングウスをエヴェンキと稱する。彼等をヤクウト人ロシア人はツングウスと云ひ、ブリアト人はハムナガン (Xamnagan 喀穆尼漢) と云ふ。

a　アンガラ (Angara) 上流方言。バルグジン語に近い。

b　バイカル湖畔方言。サマギイル (Samagir, Šamagir) と言はれるのがこれである。バルグジン語とネルチンスク語との間に位する。

B　ネルチンスク語。自分ではオロチェンと稱してゐる。

a　カラル (Kalar) 方言。

C　トランスバイカルの遊牧ツングウス語。一部はツングウス語を使つて自らエヴェンキと稱してゐるが、一部はツングウス語を忘れてブリヤト語を使用しハムナガンと稱してゐる。

a　マンコワ (Mankova) 方言。

b　ボルジア (Borzia) 方言。

c　ジリンダ (Žilinda) 方言。以上三方言は今は亡佚したウルルガ方言に類似してゐるが、マンコワよりはボルジアの方がよく維持してゐる。彼等をロシア人はツングウスと、馴鹿ツングウスはムルチェンと、又ジリンダを時々エヴェンキと、ブリヤト人はハムナガンと呼ぶ。

D　ラムウト (Lamut) 語。これは此邊へ入れて置く。ヤクウト及びオコツク海岸に住んでゐる。自稱はエヴェンキと云ふ。ヤクウト語の影響がある。

a　ツムン (Tumun) 方言。

E　エニセイ河畔遊牧ツングウス語。これもこゝへ入れたがCの方言かも知れない。

2　滿洲系。

A　ソロン (索倫) 語。この語はダグウル語 (蒙古語Ⅱ5) からの輸入語が多い。遼時代からダグウル人と混じたからだらうと云ふ。野人女直の事か。自稱エヴェンキと云ふが尙ほ種々に云ふ。ソロンとは蒙古語で朝鮮人を呼ぶ Solonggos から來たので、彼等は東方から移つたんだと云ふ。

B　興安語。興安嶺中心の諸語。

a　オロチョン語。自稱はオロチェン。彼等を近隣の馴鹿ツングウス及びロシア人はオロチョン (Oročɔn) ともガンチェン (Gänčen) とも云ひ、ダグウル人はホンコルソロン (Xongkor-solon) と呼び、滿洲人はオロンチョ (Orončo)、オロンチュン (Orončun 鄂倫春) と云ふ。馴鹿ツングウスは又マニャギイル (Man′agir) とも云ふ。クマルチェン方言小興安方言に近い。

b　メルゲン (墨爾根) 語。矢張り小興安方言クマルチェン方言に近い。自らはエヴェンキと云ふが、他の近隣種族からはオロンチョ・オロチュン・オロチェン・オンコルソロン (Ongkor-solon) と呼ばれる。

β　ガンチェン (Gänčen) 方言。

α　ナウチェン (Naučen) 方言。

c　小興安語。

γ　クマルチェン (Kumarčen) 方言。クマラ (Kumara) 河地方のものである。滿洲語ダグウル語からの輸入語が多い。自稱はエヴェンキであるが主として老人が云ふので、今一つオロチェンとも稱するから彼等を滿洲人はオロンチョ・オロンチェンと云ふ。又キリン・チリン (Kilin, Čilin) とも云ふ。キリン・チリンとは支那人が凡ての北方ツングウスを稱する言葉だが、初め彼等に吉林地方で會つた爲めだらうか。ロシア人はマニェグルイ (Манегры) と云ふのはマナギイル氏族名から採つたんだ。

δ　ビラルチェン (Birarčen) 方言。これは二つに分れ、一はクマルチェン語と殆んど變らないが、一はゴル

ヂ (Goldi) 語に影響されたものらしい。後者はロシア人の云ふキリ (Kili) 族で、シュレンク (Schrenck) の云ふ Kiler はこれである。自稱はエヴェンキともビラルチェンとも云ふが、滿洲人は之をオロンチョ・オロンチュン・キリン・チリン・チリキと呼び、支那人はキリン・チリン、ロシア人はビラルと云ふ。

C　滿洲馴鹿ツングウス語。ビストラィア (Bystraia) 地方に居つて上記の種族とは別種である。この言語はネルチンスク語殊にカラル方言に關係がある。ヤクウト語の影響が大きい。だからロシア人はヤクウト人と云ひ、滿洲の興安クマラのツングウスはジョコ (Joko) と呼ぶ。ロシア人は又キンヂギル (Kindigir) とも呼ぶ。この語は多分シベリア系と滿洲系との中に立つものだらう。

ε　黑龍江の馴鹿ツングウス方言。ヤクウト語の影響がある。

D　ネギダル (Negidal) 語。この語は極北アジア語族の要素が多いので、ツングウス語族に入れない人もある。

II　南方ツングウス語派。

3　北滿洲系。

A　ゴルヂ語。支那で云ふ魚皮韃子の中に這入る。自らはナナイ・ナニ・ホヂェン・ホゼン (Nanai, Nani, Xoden, Xozen) と稱す。

a　松花江方言。

b　烏蘇里河方言。この種族にはサマル・サマギル・サモギル (Samar, Samagir, Samogir) 氏族、キリ・キレキ (Kili, Kileki) など呼ばれるものがゐる。

c　黑龍江方言。

α　オルチャ (Olča) 方言。マングン (Mangun) 族と呼ばれ、自らはナネイ・ナニ (Nanei, Nani) などと稱す。

4　東滿洲系。

B　オロチ (Oroči) 語。ゴルヂ語滿洲語その他方言の影響が多い。自らはオロチと稱するがナニとも云ふらしい。沿海州に居る。

β　オロキ方言。樺太の北部の方言である。オロッコとも云ふ。ナニとも自稱す。

C　ウデヘ (Udehe) 語。オロチ語の南の方で、オロチ語よりは滿洲語に近い。シロコゴロフ氏はゴルヂ語ウデヘ語オロチ語を北方ツングウス語派に入れたいと云ふのだから、この北滿洲系東滿洲系の諸語は南方語派と北方語派殊に滿洲系との間に立つ語なんだらう。

5　南滿洲系。これが所謂滿洲語である。

D　滿洲語。これは別に次に述べることとする。

現代通古斯語分類表

I　北方派

1　シベリア系

A　バルグジン語

a　アンガラ上流方言

b　バイカル湖畔方言

B　ネルチンスク語

a　カラル方言

C　トランスバイカル語

a　マンコワ方言

b　ボルジア方言

c　ジリンダ方言

D　ラムウト語

a　ツムン方言

E　エニセイ語

2　滿洲系

A　ソロン語

B　興安語

a　オロチョン語

b　メルゲン語

α　ナウチェン方言

β　ガンチェン方言

c　小興安語

γ　クマルチェン方言

δ　ビラルチェン方言

C　滿洲馴鹿民語

ε　黑龍江馴鹿民方言

D　ネギダル語

II　南方派

3　北滿洲系

A　ゴルヂ語

a　松花江方言

b　烏蘇里河方言

c　黑龍江方言

α　オルチヤ方言

4　東滿洲系

B　オロチ語

β　オロキ方言

C　ウデヘ語

5　南滿洲系

D　滿洲語

ロ　現代滿洲語

滿洲語が死語でない事は初めに述べた通りである。而してその現存滿洲語が何處に存在してゐるかと云ふ事は滿洲語諸方言の問題となる。シロコゴロフ氏の前掲專門論文には纏めてあるかと思ふが今は參考し得ないから、見るを得た論文その他の報告から推想して見る外はない。どうもハツキリした語學的研究報告はない樣である。

滿洲語は以前は北は黑龍江畔から西は內蒙古に及び、南は北平邊に至る迄擴がり、殊に吉林奉天北京方面等には大集團もあつたものだが、漸く支那文化の大影響を受けて殆んど忘却せんとするに至つた。北平奉天地方は言ふも更なり、吉林黑龍江畔でも漸く使用しなくなつて來た。殊に滿洲人の知識階級迄が文語としても之を忘却するに至つたんだから變化も甚だしい。さうして北滿洲でも却つて他のツングウス種族や蒙古民族の間で之を保存してゐるものが多いと云ふのであるから不思議なものである。書籍上の見聞に想像も交へて先づ現存するものは次の如く見てよいかと思ふ。

a　黑龍江省方言。愛琿・墨爾根・布多哈・齊齊哈爾などの周圍に多い。愛琿方言はかなり異なつたものであると云

ふ。多分場所柄から諸種族の影響が多いのであらう。この省のツングウス族も大分使つてゐる様である。

b　興安省方言。この方言は南北分省に互つてゐるから廣いが、大體齊齊哈爾方言に近いだらう。海拉爾附近は蒙古人ダグウル人ツングウス人も多く使用してゐるのを考へると、滿洲文化の影響から來たものだらうから當然文語に近からう。

c　吉林省方言。吉林省城では忘却してゐるが、三姓・寧古塔・阿什河などの部落には存してゐる様だ。その他の地方にも遺つてゐると思はれる。寧古塔地方は清朝發祥の地であるから文語となるべき語の祖語地と云へる。文語に近からう。

この外に奉天・北平・東部內蒙古などにも、かすかに記憶してゐる滿洲人の遺族があらうけれど、必ずや彼等の記憶に殘存するものは文語の遺物であらう。

以上の様に分けて見たが勿論明瞭なる研究の結果ではないのだ。想像して見ると、aには古體を存した所があり、bには古體もあるが變化も多く、cは文語風を存してゐるだらうか。aの內でも齊齊哈爾附近はbの分類に入れる方がよいのかも知れない。

これ等滿洲語使用の人はかなり存在するのだから、忘却しつゝあるとは云へ、滿洲語は滿洲國政府引いては我國の問題である。滿洲語と云ふと滿洲文語の研究と思はれ勝ではあるが、學術的にも政治的にも現代滿洲方言の研究が必要なのである。言語變化の多い北滿洲の研究は今に於て實着なる調査をしなければ他日の悔となるに相違ない。

八　女　眞　語

清朝を興した滿洲民族は宋初に於て金國を建てた女眞民族の後であるから、建國の初めに於ては金又は後金と稱したのである。その元の女眞民族の金帝國は蒙古民族の元の太宗に亡ぼされてからは滿洲東北部に散在して、明の頃には野人・建州・海西の三大部に分れてゐたが、その建州女直から清朝が興起したのである。因に女眞と女直とは同じ事で、ドニイの云つたアルタイ語の特色の語尾のnの脫落（I 6）の相違だけの事である。

女眞民族以前に滿洲に出沒した諸民族の名が歷史上に多く見えるが、後來の女眞民族と關係の深いと見られる最古のものは肅愼或は息愼である。旣に先秦時代に存在して孔子が知つてゐたと云ふ話もある。その系統を引くと見られるものは挹婁、次いで勿吉、次いで靺鞨である。さうして粟末靺鞨から女眞が出てゐると云はれる。尙ほこの外に穢貊とか渤海とか扶餘とかも關係があるらしいが、ハツキリしてゐない。この渤海は我國と交際もあつた文化國であつて、或は特別の國字をも持つてゐたんではないかとの疑もある。渤海は女眞と同種族だとも云はれてゐる。これ等の諸民族は女眞と關係が近い樣に種々論じられてゐるが、言語學的資料が闕けてゐるので殆んど今の問題と爲し難い。こゝに女眞に至つて我々は初めて言語學的資料を見るのである。

その資料と云ふのは、明代になつて出來た「華夷譯語」の中の女眞譯語と云ふ節用風の對譯字書と、これに附錄せる「女眞館來文」と題する對譯の表文集とである。譯語には女眞語とその漢譯と漢字で表はした發音とが附いてゐるんだから實に絕好のものである。碑文なんかもあるが發音が分らないと言語學的には中々役立たない。この譯語と來

文とのベルリンにあつたものを出版して少しく研究を附したのがドイツのグルウベ (W. Grube) 先生であつた。Die Sprache und Schrift der Jučen. Leipzig, 1896 といふ本で、これで初めて女眞語と滿洲語とが同種語と確定されたわけである。彼は比較研究して同系統語たるを證したのであつた。最近になつては我國や支那に傳はれる譯語來文等が紹介され出版もされるに至つたし、女眞文字の金石文も既知の支那朝鮮シベリアに存するもの以外に滿洲國からも新に出土してその數を增して來たのであるから、益〻資料は增加して來た。滿洲國の羅君美（福成）先生もこの語に力を致して居るが、我國の渡部薰太郎先生の努力には敬意を表せねばならない。渡部先生は滿洲語學者であるから譯語來文の女眞語に對する滿洲語を綿密に對照研究してゐられるので、既出の「女眞館來文通解」にもその一端を發表し、今や既知女眞語と滿洲語との對照字書を遠からず世に問はんとしてゐられる。女眞語學滿洲語學に貢獻する所大である。只來文は肯て女眞語のみでなく他の語の中でもだが、どうやら漢字のものを譯語で直譯したに過ぎないと見える迹があるので、文法上の研究には大して信用が置けない疑があるが、いづれ此等の知識から石刻文が解讀し得らるゝ様になるだらうと思ふ。さうすれば文法上の解明も期して待つべきだらう。尙ほ「金史」には夙に國語解が附してあり、淸の「欽定金史國語解」には滿洲語をも參照してあるが、渡部先生にも滿洲語による「新編金史名辭解」もある。新銳の滿蒙學者秋定實造敎授も近來女眞語の研究に從事すると聞くから目覺しい成績を期待出來るだらう。

女眞語と滿洲文語との比較によると、大した變化はしてゐない様で、ドニイの擧げた難點を想起せしむるが、それでも數詞に古體を存してゐたり、動詞の接尾辭に幾分變化を示してゐる點など注意される。純然たる言語學的研究が進めば尙ほ種々なる解明がある事だらう。

女眞民族は自己の言語を寫すに特殊の文字を持つてゐるが、大字小字の二體有る事が信ぜられてゐた。何れも漢字から示唆を得てゐると思はれ、發音を主とするアルファベットでない。大字は大金皇弟都統經略郎君行記の石刻の字が一石あるきりで、その他は皆小字と考へられてゐた。然るに近時遼の慶陵から聖宗・興宗・道宗・諸帝及び諸皇后の哀册文が發見され、それに遼國書卽ち契丹文字のものを伴つてゐた。その契丹文字こそ正しく女眞大字と云はれたものと同じであつた。そこで從來女眞大字と云はれたものは契丹文字に外ならなくて、蓋し女眞の初めは勝朝の文字を利用して契丹語のまゝか或は女眞語を寫したのかだつたが、後には自國字を契丹文字を基礎として作つたものだから、繁雜なる契丹文字風のものを大字とし、簡單なる後出の自國字を小字と稱したものであらうか。今學界注視の新發見材料だから或はその內に解讀が進んで疑團を解決してくれるだらう。最近滿洲國で出版された「遼陵石刻集錄」は契丹文字資料を集成してゐるが、まだ遺漏がある。契丹民族は何民族であるか出自は定まつてゐないが、これ等も解明されると、よし通古斯民族でなくても、ツングウス諸語との關係は必ず問題となるに相違ない。契丹の文字言語の解釋は羅君美も着手してゐるが、ペリオ博士・羽田博士・秋定教授に多く期待する。この國際オリムピック競技にも我が日の丸の國旗を早く揭揚したいものだ。

二　滿洲文語

上述の如く女眞民族は金帝國を建設して契丹文字の基礎の上に女眞文字を創作して國書としたが、金が元に亡ぼされてからも矢張り女眞文字を使用してゐたものらしい。だから明代の女眞が明へ差出す表文にも女眞文字で書いたの

で、譯語來文集などが出來たわけである。然しこの女眞文字も實は女眞人間にさう行はれたわけでなく、特殊の外交官位が知つてゐたに過ぎないらしい。あの來文すらが前にも一寸言つて置いた通り漢文のものを直譯したらしいので、或は漢人が代つて譯したものでないかとさへ思はれる。そんなら女眞人間ではどうしてゐたかと云へば、蒙古文字を使つてゐたらしいので、たしかベルリンかの來文中にもそんなのが有つたかと思ふ。だから明代にも女眞文字は使用されてゐたとは云へ、漸次蒙古文字に交代しつゝあつたのだ。蒙古文字の蒙古語の文書を使用する樣になつてゐたんだらう。そこで滿洲の太祖努兒哈赤は時の書記官巴克什であつた額爾德尼と噶蓋との二人に命じて蒙古文字で滿洲語を書かしめた。所が二臣は「蒙古語蒙古文字は臣等習うて之を知つて居ますが、相傳の久しい事であるから今改制する能はざる所であります」と答へると、太祖は更に說きて「漢人は漢字を習うた者でも習はざる者でも漢文を讀むを聽けば其意義が明白に分る、又蒙古人の蒙古文に於けるもこれと同樣であるのに、今我國ばかりは必ず蒙古語に譯して書くから、蒙古語を習知しない者には讀み聽かされても分らないのである、我が國語で文字を制することが困難であつて他國の語を習ふことが易いと云ふ事はあるまい」と諭されると、二臣は「我が國語で文字を制することは最も善いけれども、但だ、臣等はその方法を知りませぬから困難であると申すのでありまする」と答へた。太祖は「それは難しくない、但だ蒙古文字を以て我國の語音に合せて聯接して句を成せば、文に因て義を見る事が出來る」とてその方法を教へて、之を國中に頒布した時が太祖の己亥卽ち明の萬曆二十七年二月だつたと云ふ。この傳說は功を君主に歸したので、或は滿洲語を蒙古文字で書くのは爾巴克什の創案であつたかも知れないが、それよりも重要な事は已にこれより以前に蒙古語蒙古文字の文書が存在した事、或は進んで滿洲語蒙古文字の文書もあつたので之を標準化せ

しめんとしたのかも知れない事を示唆してゐる點である。然し兎も角も之によつて滿洲人が蒙古文字を採用する事を公布されたわけで、從つて滿洲文語が發達の第一期に這入つた事になる。

所がこの頃の蒙古文字はまだ古典的の定形が出來ない時で、今の蒙古文字の様に音の區別を文字を見た丈で容易く解る様に兩側に圈點を打つ事なんかしなかつたものである。それは蒙古文字の出たウイグル文字でも同様であるが、然し古くはウイグル文字にも圈點を打つて見た事もあるのだが、何しろその語を知つてゐる人ならばそんな面倒なものがなくとも讀むには差支が無いからでもあらうが、後にはウイグル文字も蒙古文字も普通には圈點が略されてゐた。今でも手紙など略式の草行書で書いたものには略される。例へて見れば我國の濁點と同じである。然しハツキリしてゐる方が便利であるから、終に太宗の天聰六年に有名なる當時の巴克什の達海或は大海がそれやこれやで之を整理して新に有圈點の文字で文語を制定して頒布した。これが滿洲文語の第二期となる。だから第一期の文書を無圈點檔案、第二期のを有圈點檔案とも云ふ。この有圈點文字文語の整理にも蒙古文字の圈點やガリク字體や文語などが基礎となつたのは勿論である。然も愈〻獨立した文字文語が制定されると、之によつて檔案語から文學語へと進出して、飜譯がどんどん行はれる様になつた。それと同時に漢人の滿洲語を習得するものも增加して來た。これ等の趨勢が進んで遂にかの清朝全盛期を形成する康熙乾隆間に於て西藏大藏經蒙古大藏經滿洲大藏經の校訂飜譯出版の時代が現出した。これ等三大藏經出版の爲めにこゝに西藏蒙古滿洲三文語の整理制定事業が先驅する。而して滿洲文語の第三期が起る事となる。尤も第二期で起つた變革が第三期で完成すると見て倂せてもいゝ。

こゝに注意すべきは第三期文語の先驅者としての沈啓亮である。沈啓亮は康熙十年已に「清書指南」一卷を著はし

て滿洲語の助字虛字を漢人の爲めに說明したが、康熙二十二年には「大淸全書」十四卷を著はして滿漢字書を初めて完成したが、この字書によつて動詞の體相が具備して來たと云はれるんだから、滿洲文語は第三期に這入つたわけである。引續いて「欽定淸語」「御製淸文鑑」及び乾隆增訂本、滿蒙漢三合切音本等が出でて文語の標準となつた。これ等第三期標準文語が定著する爲めには參照された西藏文語蒙古文語及び支那文語が多大の影響を與へてゐる。古典的蒙古文語組織化の學僧章嘉胡土克圖も與つて力有るに違ひない。この語が今日迄續いて行はれてゐる。

偖て又、かく標準化は淸朝全盛の情態からも起きるわけであるが、一方から見れば滿洲方言及び漢人蒙古人其他民族の引起す滿洲方言が混亂を來たしつゝある爲めの必要からでもあらう。現にかく文語の規準が定まつた以後にも文語の間の方言化が續行したと見え、北京なんかでは滿洲文語も種々あつたと云ふ。恐らく淸朝後期に滿洲語が北京邊りでそろそろ忘却されて來て、文語が北方へ北方へと移動し行くに連れては、漸く文語も第四期と云つていゝのではなからうか。さうして恐らくは蒙古語支那語を主として他のツングウス語から影響を被つて行つたらう。遂に却つて文語が蒙古人ツングウス人によつて維持される事態に立ち至つたのである。

殆んど全期を通じて滿洲文語は文書語揣榮語であつた。飜譯によつて文學語として一時利用されたが、それも殆んど支那文語からの飜譯であつて、直接蒙古語西藏語からのものは極めて少ししかない。蒙古語のものは支那語を通じたり、西藏語のものは蒙古語を通じたりして譯述してゐる樣なのがある。支那文化の偉大なる壓迫の下に、支那語は文化語として勢力を增し、蒙古語は第二國語の樣な事情であるから、文學語としての滿洲文語は生命が短くなるのも自然であつたらう。傳承文學なんかが殆んど知られないのも恐らく早くから支那蒙古の文化に服從せしめられた結果

であらう。

附記　引用して置いた以外の參考手引書を述べる。滿洲語一般を論じたものには元の浦鹽東洋學院教授グレベンシチコフの А. В. Гребенщиков: Маньчжуры, их язык и письменность. Владивосток, 1912 がある。教授には尙ほ Краткий очерк образцов маньчжурской литературы. Владивосток. 1909. Очерк изучения Маньчжурского языка в Китае, Владивосток, 1913 などの著書がある。諸處の滿洲方言も集めた樣だが出版はされない樣だ。西洋人の滿洲語研究は B. Laufer: Skizze der Manjurischen Literatur. Keleti Szemle, 9 Kötet. Budapest, 1908 を見れば分るが新しいものは出てゐない。浦鹽でグレベンシチコフ教授監修のものが出る筈だつたが中止された樣だ。

我國のものでは故出村良一氏の「短期支那語講座」第一卷に書いた「滿洲語に就いて」は要領は得てゐるが簡單過ぎる。渡部薫太郎先生の Manchu Tribe and its Language. Osaka, 1929 は雜誌滿蒙及び大連デイリ・ニュスに出た文の訂正謄寫版本だが、全般に亙つて簡單だが親切である。今西龍博士の「滿洲語のはなし」は語學的の事はないが、滿洲語の歷史及び研究史に就いては獨特の資料を提供されてあつて佳著である。僕は中から一寸その儘引いた。新進の言語學者江實君は滿洲語の文獻錄を編纂すると聞くが、多分ラウフェルの闕が補はれると期待する。

後記　本書を書きあげるに就いて、吾友　泉井久之助・笠井信夫・高橋盛孝・渡部薫太郎の諸君から得た注意と示唆と助力に對して、玆に衷心からの感謝の意を表します。

昭和九年十月十　日印刷
昭和九年十月十五日發行

岩波講座　東洋思潮
第五回配本

版權所有

編輯兼發行者
印刷者
東京市神田區一ツ橋通
岩波茂雄

印刷所
東京市神田區錦町
精興社

大森製本

發行所
東京神田一ツ橋通
岩波書店

満蒙言語の系統

石濱純太郎